

# 芸術・学問融合で新たな世界

土佐 尚子氏

芸術は現代社会の行き詰まりを打破し、新しい次の舞台をつくりだせるだろう。芸術と法学、芸術と経済学、芸術と科学といった従来にはなかった組み合わせは、幅広く柔軟な学問の土壌を供えた京都大ならではの



とさ・なおこ 1961年生まれ。専門はアートとテクノロジー研究。MIT高等視覚研究所などを経て現職。2016年度文化庁文化交流使。作品はニューヨーク近代美術館がコレクション。

の可能性だと考えている。絵筆を握り、写真、映像なども経た現在、私はテクノロジーを用いた芸術作品の制作を進めている。人生では禅の教えに強く引かれた。2015年の琳派400年では「風神雷神」にちなむ映像を高速度カメラで制作し、京都国立博物館の外壁に投影させた。動く風神、雷神と狂言、いけばなを交えた映像は、21世紀の琳派を表現したいと思った。

この取り組みに対し、芸術関係者からはさまざまな感想があったと聞く。過去を振り返れば、歴史に残る建物や芸術の制作過程には、その時々々の最先端技術が関わっていることが多い。批判を恐れずに、芸術を歴史の延長線上で捉えることはより重要ではないか。

実際、京都の伝統的な世界には京博で展開したような「テクノロジーと芸術の出会い」に対する柔軟な理解を感じる。2016年、臨濟宗建仁寺派大本山・建仁寺に掛け軸作品「雲の上の山水」と寺に2000年生きた鶴の木の写真をデジタル加工した「静寂」を奉納した。「雲の上の山水」は、約千枚の飛行機の上から撮影した雲の写真から作ったデジタルアートの山水で、和紙にプリントアウトした十二幅の掛け軸だ。現在は、本堂の「風神雷神図」（複製）の左手に展示されている。京都五山のひとつが、このような作品を受け入れてくださるのはいへん光栄で、小堀泰蔵・建仁寺派管長から「禅

的な作品だ」と批評された。

これらは、芸術を美術館やギャラリーといった非日常空間から日常に移す試みでもある。ミュージアムで難しい顔で鑑賞するだけでなく、肩の力を抜いてアートに接すること、例えば勤務先のビルのロビーなどに芸術作品が並べば、企業でも新たな価値創造に結びつくかもしれない。

京大でもこれまでデザイン力が注目されてきた。論理だけでなく、柔らかな思考で現状を改良・改善できるだろう、と。しかし、改善は、まったく新しい価値創造ではない。芸術こそが新しい価値を発見し、新しい創造に結びつけられるのだ。

あす22日午後1時から京都府立京都学・歴史館で「伝統文化と科学・芸術の新たな出会い」をテーマにした日本学術会議のシンポジウムがあり、「伝統芸術と科学」と題して京大の山極寿一総長と私が対談する。一般の方の聴講も歓迎だ。ぜひ一緒に考えてほしい。（京都大学大学院総合生存学館特定教授）